

## 第6章

# ウィズコロナ・ポストコロナを見据えた 若年女性のエンパワメント

山口 慧子

### 1 はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）拡大は、全世界的に若者、特に弱い立場に置かれた若者や若年女性に、教育や雇用、心の健康などの面で深刻なリスクをもたらしている。OECD諸国の若者が最も懸念するコロナ危機の影響は心の健康で、米国で実施された調査によると18～29歳の若者世代が、他のどの世代よりも極度に高いストレスを経験していることが分かっている（OECD 2020:7-11）。日本でも、若年女性の自殺率や、妊娠・避妊に関する10代からの相談件数の急増が報道されており、セクシュアル・マイノリティの若者に関しては、就労環境や就職に関する不安、収入減、コミュニティやパートナーと会えないことによる孤立感など、日常的にも困難性が高い若者が社会経済的に具体的な懸念を抱えていることが報告されている。しかし一方で、感染症の影響を大きく受けている若者の声を聞き、それを反映したコロナ対策を実施するどころか、陽性者数が発表される度に、若者の行動パターンに大きな要因があるかのような発言が、多数の政治家から繰り返し聞かれている。

このような状況下で、社会正義の実現や地域社会のニーズに沿った活動を実施する市民団体は暗中模索を強いられてきた。「若い女性をエンパワーし、

共に社会変革を進めます」をミッションに掲げ、国内では全国24の地域拠点と37の中学・高等学校で活動を展開するYWCAも、内外的な制約と責務の間で葛藤してきた団体の1つである。

この危機が社会に与える影響の多くを長期にわたり背負うのは、若者である。課題が多く露呈され、追い込まれる若者が多い中、今YWCAのような女性団体が試行錯誤して実行している乗り越え方の中に、少しでも望ましい社会につながる一助があるのではないだろうか。本稿では、コロナ禍での筆者の経験を紹介しながら、そこで学びや課題及びウィズコロナ・ポストコロナを見据えた若年女性のエンパワメントに必要な諸項目を考察する。

## 2 コロナ禍における若年女性を対象とした取組と葛藤

コロナ禍以前は、全国のYWCAもほとんどすべての事業を対面で実施してきた。「YWCAは人であり、出会い、対面で共に創りあげる過程こそ、全国運動の特徴である」と言われてきたほどである。YWCAは全国運動ではあるが、地域変革を目指して全国各地の拠点が地域社会のニーズに応え、その上で必要なネットワーク構築やアドボカシー等の後方支援を担うのが日本YWCAの役割である。その限りにおいて、日本YWCAの職員として筆者は何をすべきか模索していた。

国内で感染が拡大し始めた2020年4～5月にかけて、主に若年女性を対象とした「ウェブ・セーフ・スペース」というオンライン上の居場所事業を全5回開催した。大学の休校や同居人との不仲による孤立、収入減などの心理的経済的影響を受けた若者が安心して悩みを相談でき、互いに支え合える場作りを目指した。若者はコロナの影響や予防方法について無知であるという思い込みを前提とした、若者向けコロナ感染予防啓発キャンペーンが厚生労働省や各自治体主導で行われているが、第1回ウェブ・セーフ・スペースで情報提供を主にした際、参加者は緊急事態宣言等の措置やコロナの心身への影響についてよく理解しており、しかしその中で具体的にどのように対応

## II 実践の展開

すれば生活や活動を継続できるか、悩み苦しんでいた。そのため、まずは心配事を安心して共有できる場をつくることを重視した。

オンライン上の居場所をつくる上で課題もあった。不安や悩みは個人的でセンシティブな事柄である。実際にさまざまにコロナの影響を受けた若者の存在を把握していたが、不特定の人が参加する場は安心して自己開示できる場にはなりきれず、参加には至らなかったケースもある。より高いレベルで個人情報が保護される環境が必要とされた。他方で、詳しくは後述するが、自身が直面している課題は専門家に相談すべき度合いのことなのかどうか判断がつかなくなかったり、相談機関に行ったとしても、個人的な悩みを他者が理解し得る形で言語化することのハードルが高いと感じる人は少なくなかった。ウェブ・セーフ・スペースの参加者の大半は筆者と面識のある人で、身近で話しやすいピアな関係性にあつたからこそ、緊急時の居場所かつ相談相手になれる可能性を有していたのである。

その翌月、2020年6月には、YWCAの意思決定機関で役割を担う若年女性を対象とした「全国コアユース・ギャザリング」の企画を開始した。オンラインで展開したウェブ・セーフ・スペースとは異なり、企画チームは疫学上のリスクを十分認識し徹底的な感染症対策を講じた上で<sup>1)</sup>、全国コアユース・ギャザリングを対面実施することに固着した。その背景には、若年女性が置かれた複雑な社会状況と、それにより分断が引き起こされていたことがある。

その1つが、大学生の孤立化である。YWCAに参加する若年女性の大半が18～24歳までの大学・大学院生相当年齢に該当する。全国コアユース・ギャザリングを企画実施した2020年6～9月、全国的に一時休校措置が取られた小学校を含め、小中高校は対面での授業を再開し、多くの労働者も出社での勤務を求められていたが、依然として大学・大学院だけがオンラインでの授業継続、大学への登校を禁止している状況にあつた。オンライン授業の課題量は圧倒的に増えた一方で、授業前後の余白の時間に友人と気晴らしをすることもできず、孤立し、深刻な精神状態に陥っているという学生の声が多

く寄せられていた。プログラムの延期も検討されたが、周囲の同世代の友人達の精神状態に気づいていたからこそ、9～10月頃から始まる後期の授業方針が定まらない中で、開始時期を遅らせることは社会課題に取り組む気力が完全に奪われるばかりか、「ステイ・ホーム」中に家庭内で暴力や排除に晒されている若者にさらに追い打ちをかけることに繋がってしまうのではないかという危機感があった。

2つ目に、自粛要請がもたらした社会運動への政治的圧力があった。企画チーム及び日本YWCAの運営委員会や理事会でも対面開催について、迷いや批判的意見が幾度となく聞かれた。それでもなお、若い活動家が物理的に集結する必然性があると考えていた背景には、不要不急の外出自粛要請に応えるように、差別や暴力に取り組む全国のYWCAの現場も多くの活動を制約し、それによりコロナ禍で生じたさまざまな課題に答えられずにいたことがある。企画チームの一委員は以下のように危惧を表明していた。

コロナ禍で怖いと思うのは、「御上」からの言葉が絶対になっているということ。政府が自粛を宣言したら、全員がそれに従うような状態になっている。個人が主体的な判断をできなくなっていることが恐ろしい。コロナだからできない、と言っているうちに、コロナが明けても別の言い訳を探して行動ができなくなるのではないか、という懸念が頭の中で鳴り響いている。(中略) コロナ禍で「いのちを大事にする」ということをどのような方法でやっていくのがYWCAらしいことなのか、この企画を通じて考えていきたい。

市民活動が縮小傾向にあることに抗おうとする委員に対し、他の委員は感染者を出してしまう可能性を除去し切れない中での実施行為そのものが無責任だと追求される恐れを吐露した。

(Go To トラベルキャンペーン等) 政府の方針を見ると「市民それぞれに

## II 実践の展開

判断はお任せ。何かあれば自己責任」という姿勢でいる。(中略)先日自分のパートナーにコアユース・ギャザリングの対面開催を検討していると伝えた際、参加者に責任を負わせるかもしれない中で実施をするのは、無責任だと言われた。実施する行為そのものが無責任である、とのこと。もちろん、延期やオンライン開催に勝る安全はないが、それでも対面で実施することの意義はあると思うので、揺れている。

公衆衛生面だけでなく、社会経済的にも効力を持つコロナ対策が十分に実施されない政治的状況下で、「いのちを守る」名目で組織全体が活動の一時中止傾向にあった。その中で、周囲の若年女性のウェルビーイングが損なわれている状態を認識していたからこそ、企画チームは直接会うことで強化される信頼関係やピアサポート、思いを分かち合う仲間と出会うことで得られる活動の推進力と、万が一感染者を出した場合の自己責任論の狭間に置かれることになった。

さらには、新しい運動形態を積極的に試行する契機にしたいという思いも背景にあった。コロナ危機は即座に収束しないことが予想される。中長期的にコロナと共存していかなければならないのであれば、事業の休止ではなく、どのように感染症に対応していくべきなのかを前向きに検討するべきであると考えた。

結果的に、全国コアユース・ギャザリングは完全にオンラインで実施する運びとなったが、結論に至るまでに若者が若者にとって最大の利益となるよう議論を重ねたプロセスからいかに学ぶかが、ウィズコロナ・ポストコロナ時代に組織や社会が若年女性のエンパワメントを実現する上で重要になるはずである。

### 3 組織のジレンマ

上記の取組を通じて、コロナ禍での若者のニーズに敏感に気づき、最も効

果的に応答できる可能性があるにもかかわらず、若年女性の主体的判断の尊重に踏み切れない団体の限界に相对した。コロナ禍以前からの事業推進機関を巡る外的条件と、組織体質が要因であることは明白であった。

まず、活動資金獲得の問題が挙げられる。助成金に収入の一部を頼らざるを得ないNGOは、使途に沿って活動を実践し、どのような成果を上げたかを目に見える形で証明し、アカウントビリティを果たすことが求められてきた。YWCAは自発的参加を基本とし、さまざまな活動実践を通して、若者が仲間を得、学び合うユースワークの先駆的組織の1つであるが、ユースワークを研究・実践する平塚眞樹は著書の中で、1980～90年代頃、新自由主義が拡大する中で「ユースワークへの政策的関心が‘困難’を抱えた一部の若者に焦点化（Target）し、‘社会的包摂’を目的に援助する活動に移行」していき「ユースセンターのような開かれた（Universal）活動には公費が配分されにくい傾向が進んでいった」ことを指摘している（平塚 2019:55）。助成団体や組織の方針に従うのではなく、若年女性自身の懸念や関心事から派生したテーマを設定するような、若者のニーズや主体性を中心に据えた性質の事業は助成団体にとって「投資」に見合った「成果」とはなりにくい。

また、変化する現場のニーズに中長期的に対応していくためには、人件費や通信費含め、組織の固定費に充てられるコア・ファンディングや、団体のニーズに合わせて使途を自由に選択できる柔軟な資金源が重要であると、女性団体やフェミニズム運動は指摘してきた（AWID 2019:17）。コロナ禍で多くの女性団体が経済的打撃を受ける中で、若年女性のニーズに沿った形で利用できる助成金が慢性的に不足しているということは、彼女らが行動し続けていく気力の喪失にも繋がりがかねない。

長年運動に従事してきたベテランと若者の間に存在する組織内部の権力関係が、若年女性のエンパワメントを阻害する要因となる場合もある。多くの古株活動家は政治的課題に広く精通し、また啓発活動からアドボカシーまで豊富な経験を有する。それ故に、若者を無知で未熟な者として捉え、自身らの後継者として育成しようと教育的なアプローチを取る傾向にある。それは、

## II 実践の展開

往々にして若年女性の視点や意見、活動に対する正当な評価を阻害することに繋がり、結果的に、集合的効力を生み出すために不可欠な多世代間協働の失敗を招くことにもなる。

加えて、資金不足と不平等な権力構造に基づく一方的なアプローチは、若年女性の支援者がバーンアウトしやすい構造を温存することにも繋がる。ケア・コレクティブが著書の中で「ケアの与え手とケアの受け手——つまり、私たちのすべて——の双方が支援を受けないかぎり、適切に遂行できないのです。適切なケアは、能力としてであれ、実践としてであれ、ケアが生まれ、平等主義的な形で共有され、そして資源を与えられなければ、起こりえません」と断言しているように（ケア・コレクティブ 2021:11）、若年女性のニーズに対して注意を払い、応えていく行為への適切な評価や支援体制の整備が不可欠である。しかし、そのような広義の意味でのケア実践が有効かつ重要であると認識されていないことが往々にしてある。

若年女性の支援者は、日常的な関わりの中で若者との信頼関係の構築を重要視する。関係性の構築を通じて、若年女性が他者や社会課題に出会い、社会参加する主体へと自己変容するプロセスを援助するためである。活動実践の過程においても、政治社会的正義の観点から知識や方法論を一方的に教授するのではなく、若者側の視点に立ち、そこから彼女たちの選択や行動に連帯する。出会いや議論、衝突の積み重ねを通して、若者の身近な存在になることで初めて、上述したように、危機的状況下でも心理的支援が可能になり得るのである。

コロナ禍で日本YWCAが若年女性を対象に実施した事業は、既にお互いの状態が見えている関係性を生かしたピアサポートであった。しかし、ピアな関係者による相互援助は、個人的な関係性を基盤とするからこそ、どこまで介入すれば終わるのか境界線を引くことが難しく、ともすると共依存や共感疲労、バーンアウトに陥りかねない。またピアサポートは、組織にとっては、職務外の偶発的かつ個人的な支援、あるいは「行き過ぎた行為」として捉えられがちである。そのため、ピアサポートの難しさを認識すると同時に

有効な支援体制として位置づけつつ、それで完結しないよう、支援者と受益者両方の若者への、安定的かつ豊富な人的金銭的資源を含む支援体制を制度化する必要がある。

ガバナンスや予算確保といった組織運営に関して、全く課題のない市民団体は存在しないので、問題を把握し改善に向けて方向転換することを積み重ねていくしかない。上記の課題から言えることは、平時から若年女性をエンパワーする体制が十分に整備されていなければ、感染症拡大のような危機の渦中で、迅速に意思決定し効果的な対策を講じることは難しいということである。日常的な試行錯誤の中で効果的な方法を認知・評価し、それを偶然の産物ではなく、いかにシステムとして構築していけるかが、ウィズコロナ・ポストコロナ時の若年女性をエンパワーする上での鍵となるだろう。

#### 4 おわりに

コロナ危機は、年齢やジェンダー、人種、障害の有無等の個別要因により異なった影響を人々に及ぼし続けている。同時に、全世界かつ全世代的な危機の中で、誰もが「感染する／感染させてしまうかもしれない」という脆弱性から免れることはできず、共通してグリーフを経験している状況にある。ウィズ・ポストコロナにおける若年女性のエンパワメントを可能にする条件を見据えた時に、この喪失や苦悩の体験を起点とした価値と構造の転換が、市民団体と社会全般の双方に求められているのではないだろうか。

社会の歯車の中で、多くの人が願ってもない業務に膨大な時間を割き、他方で心から配慮すべき価値があると思うことを後回しにしなければならないような生き方を迫られてきた。目下に傷つきを抱える若年女性の存在があっても、内外的諸要因から、できる限りの最善の支援ができず葛藤した筆者の経験は、上述した通りである。これには、ピアサポートのような実践活動を含むケア行為とケアを担う者が社会的に周辺化され、価値を貶められてきたことがある。ケアと対比関係にある自立と自律の概念は、歴史的に「男らし



## II 実践の展開

さ」の象徴とされ、その価値は序列関係に置かれてきた。特に、自律・自立した人物というのは新自由主義における理想的な市民像であり、このイメージを積極的に打ち出すことによって、福祉国家を切り崩し、民主的な諸制度を消滅させることが正当化されてきた（ケア・コレクティブ 2021:22-23）。

若年女性と共に悶え加勢し、少しでも良い方向に向かって歩む実践行為が軽視されてきたのは、ジェンダー的抑圧と新自由主義の影響と無関係ではないだろう。しかし、ウィズ・コロナという誰もが自他の脆弱性を自覚せざるを得ない世界は、そのようなあり方を見直し、若年女性のニーズや必要性に直接のかつ政治社会制度・文化の領域で応答する可能性を併せ持っているのではないかと楽観主義的かもしれないが希望をおきたい。

ウィズコロナ・ポストコロナにおいて若年女性のエンパワメントを可能にし得る条件を整えていくために、社会運動は成果を生み出すことと同等あるいはそれ以上に、そのプロセスを転換していく必要がある。つまり、積極的に運動体の脱権威主義、脱年功序列主義、権力の再配分を成し遂げなければならないということである。その限りにおいてはじめて、支援者であり、かつ受益者でもある若年女性の悩みや傷つき、行動から対等な立場で学び、最も有意義な形で応答していくことが可能になる。ニーズに気づき、応答し、振り返り、改善を繰り返す実践過程においては、相反する意見や感情、緊張が表出され疲労することもあるが、それは若年女性のエンパワメントのみならず、多世代間の協働を促し、より広範な連帯を可能にするだろう。コロナ禍で露出された脆弱性を起点とし社会運動の価値やプロセスの転換を求め続けていくことが、ひいては社会の成熟を促進し政治システムの転換に繋がると信じ、今後も小さな実践を1つずつ積み重ねていきたい。

### 注

- 1) 文部科学省「公民館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」や厚生労働省「新型コロナウイルス感染症についての相談・受診の目安」等を参考に、参加者には事前体調チェックシートや参加誓約書の記入・提出、

プログラム前と最中におけるコロナ対策をまとめた資料配布、感染症対策に関する情報共有と協力依頼のための事前オリエンテーションの実施、感染者の差別禁止を呼び掛ける声明文の発表、またプログラム中は楽しむことを妥協しない形での感染症対策の徹底を予定していた。

## 引用・参考文献

Action Coalition Youth Leaders, National Gender Youth Activists, Youth Task Force 2021 “Young Feminist Manifesto -A Bold and Transformative Vision for Change” [https://e303bb68-0f86-4625-b0df-382bc663b63a.filesusr.com/ugd/13b9c9\\_9205e426df3a4a849fcb0166e74548f.pdf](https://e303bb68-0f86-4625-b0df-382bc663b63a.filesusr.com/ugd/13b9c9_9205e426df3a4a849fcb0166e74548f.pdf) (参照 2021年9月30日)

AWID 2019 “Toward a Feminist Funding Ecosystem” [https://www.awid.org/sites/default/files/atoms/files/awid\\_funding\\_ecosystem\\_2019\\_final\\_eng.pdf](https://www.awid.org/sites/default/files/atoms/files/awid_funding_ecosystem_2019_final_eng.pdf) (参照 2021年9月30日)

ケア・コレクティヴ著、岡野八代・富岡薫・武田宏子訳 2021 『ケア宣言：相互依存の政治へ』 大月書店

一般社団法人若者協同実践全国フォーラム 2020 「『若者にかかわる現場における新型コロナ対策の影響について』のアンケート結果」 [https://jycforum.org/covid-19questionnaire\\_4/](https://jycforum.org/covid-19questionnaire_4/) (参照 2021年9月30日)

独立行政法人国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター 2021 「I 特集 子ども・若者の「社会参加」と「余暇」～ソーシャルディスタンス時代に考える～」『国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター紀要』第9号: 2-38

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン 2020 「新型コロナウイルスの影響に関する女の子と若い女性の声アンケート集計結果」 [https://www.plan-international.jp/news/girl/pdf/200512\\_survey.pdf](https://www.plan-international.jp/news/girl/pdf/200512_survey.pdf) (参照 2021年9月30日)

日本財団いのち支える自殺対策プロジェクト 2021 「日本財団第4回自殺意識調査報告書」 [https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2021/08/new\\_pr\\_20210831\\_05.pdf](https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2021/08/new_pr_20210831_05.pdf) (参照 2021年9月30日)

## II 実践の展開

OECD 2020 「若者と新型コロナウイルス感染症：対策、復興と危機対応能力」

<https://www.oecd.org/coronavirus/policy-responses/youth-and-covid-19-response-recovery-and-resilience-60b95194/>（参照 2021年9月30日）

プライドハウス東京 2020 「LGBTQ Youth TODAY 調査レポート セクシュアル・マイノリティの若者（12～34歳）への新型コロナウイルス感染拡大の影響に関する緊急アンケート」

[https://pridehouse.jp/assets/img/handbook/pdf/lgbt\\_youth\\_today.pdf](https://pridehouse.jp/assets/img/handbook/pdf/lgbt_youth_today.pdf)（参照 2021年9月30日）

特定非営利活動法人場とつながりの研究センター 2021 「子ども・若者の声を聴くためのハンドブック～新型コロナウイルス そのとき「現場」はどう動いたか」

[https://batotsunagari.net/wp-content/uploads/2021/03/youthwork\\_handbook\\_A4.pdf](https://batotsunagari.net/wp-content/uploads/2021/03/youthwork_handbook_A4.pdf)（参照 2021年9月30日）

ジョアン・C・トロント著、岡野八代訳・著 2020 『ケアするのは誰か？新しい民主主義のかたちへ』 白澤社

若者支援とユースワーク研究会、平塚眞樹 2019 『若者支援の場をつくる vol.1

子ども・若者を支援する実践者のためのジャーナル』 法政大学社会学部平塚研究室

（やまぐち・さとこ 日本YWCA幹事）